

瓦から見えてくる歴史

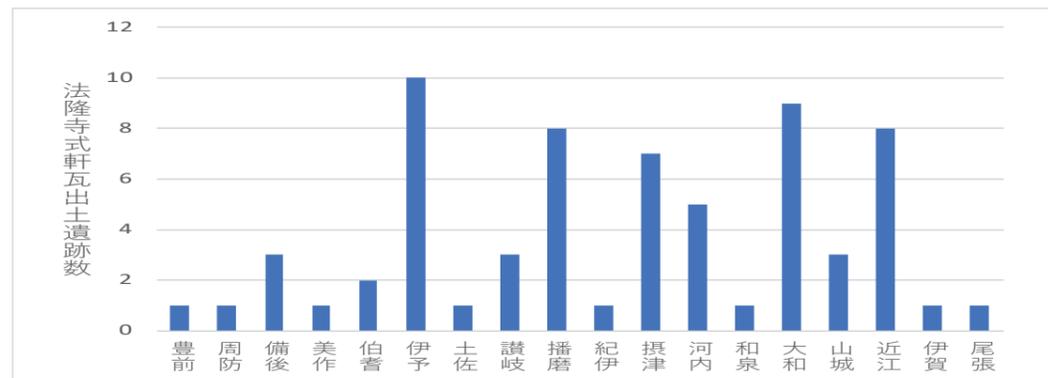
法隆寺との関わり 蜂屋遺跡で出土した瓦の中で、とくに注目されるのが、法隆寺との深い関わりを示す忍冬文単弁蓮華文軒丸瓦と法隆寺式軒瓦です(①～③・⑥)。

蜂屋遺跡が所在する栗東市北部は、古代においては近江国栗太郡物部郷にあたります。この物部郷は、その名のとおり、当初は物部氏の領地だったと考えられています。ところが、587年、当時の中央政府において、仏教の礼拝をめぐる大きな争いが起きました。仏教推進派の蘇我馬子・聖徳太子(厩戸皇子)らのグループと、反対派の物部守屋との政争です。結果、守屋は敗れ、その領地の一部が聖徳太子の領地となり、そののち、太子と縁の深い法隆寺に施入されたようです。

今回注目される法隆寺式軒瓦は、伊予や播磨・摂津など、法隆寺の領地があったとされる地域で多く出土する傾向があり(下グラフ参照)、近江では物部郷がある栗太郡に多く出土しています。今回の調査で大量に出土した法隆寺と関わりの深い瓦も、上記のような古代の豪族たちの争いや領地の動きといった歴史的背景のもと、この蜂屋遺跡にもたらされたものだと言えそうです。

東国との交流 蜂屋遺跡の重要性を考えるうえで、もう一つ注目されるのが素弁蓮華文軒丸瓦です(⑤)。この瓦は、飛驒にルーツのあるものです。蜂屋遺跡は、飛驒にもつながる古代の国道——東山道に近接していますが、そのような立地とのかかわりの中でこの瓦は出土したと考えられ、東山道を介した東国との交流も推測されます。

現代の栗東市域は鉄道や国道・高速道路などが交わる要衝にあたります。古代の栗太郡もまた東山道と東海道の結節点がある東西交通の要でした。飛驒にルーツのある素弁蓮華文軒丸瓦などの出土は、法隆寺との関わりを示す忍冬文単弁蓮華文軒丸瓦や法隆寺式軒瓦とあわせて、蜂屋遺跡や栗東市域、あるいは周辺地域をめぐる歴史の背景や地域の重要性を鮮やかに物語ってくれています。



用語解説

法隆寺若草伽藍(ほうりゅうじわかくさがらん) 創建時の法隆寺である。7世紀前半頃に創建され、『日本書紀』の記事から天智9年(670)に焼失したと考えられる。忍冬文単弁蓮華文軒丸瓦は、この若草伽藍の修理に用いられたほか、中宮寺の修理用としても供給されたと考えられる。

法隆寺西院伽藍(ほうりゅうじさいいんがらん) 天智9年(670)の若草伽藍焼失後に造営されたと考えられている、現在の法隆寺である。法隆寺式軒瓦は、この伽藍の創建時に用いられた。『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』に示された法隆寺と関係の深い地域の寺院建立にあたって、そのデザインが各地に伝播したと考えられている。

中宮寺(ちゅうぐうじ) 奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺に所在する飛鳥時代創建の寺院である。聖徳太子の母、穴穂部間人(あなほべのはしひと) 皇后のためにその宮を寺にしたという。聖徳太子建立の伝承を持つ7カ寺の一つである。

平隆寺(へいりゅうじ) 奈良県生駒郡三郷町に所在する飛鳥時代創建の寺院である。平群神手(へぐりのかむて)によって建立された言い伝えがあり、『日本書紀』にいう聖徳太子が建立した46カ寺の一つと考えられている。

レトロ・レトロの展覧会 2019 初夏の特別ミニ陳列

法隆寺から伝来した近江の瓦

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages

はじめに

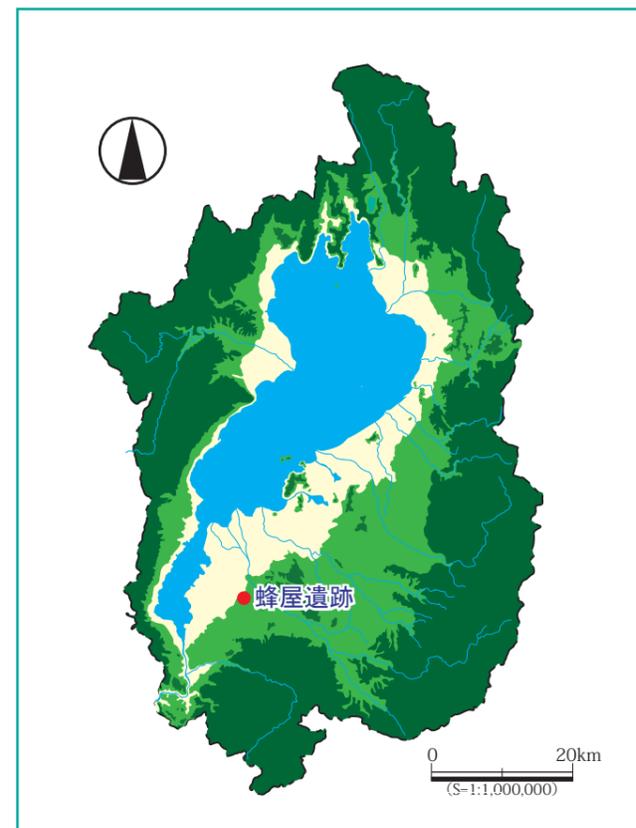
蜂屋遺跡は、栗東市蜂屋地先に所在する縄文時代から近世にかけての集落遺跡です。

平成30年度に当協会が実施した発掘調査では、「宗寺」のむねでらのむねでらの小字名がある地区において、古代寺院の寺域西辺を区画していたとみられる溝跡が見つかり、そこから多量の瓦が出土しました。瓦の特徴からは、聖徳太子ゆかりの法隆寺との関わりの深さも窺えるなど貴重な成果が得られました。

今回のレトロ・レトロの展覧会では、出土瓦に焦点を当てて蜂屋遺跡の調査成果を紹介します。

寺域の西辺を発見か!? —溝跡などから多量の瓦が出土—

見つかった溝跡は2条あり、正南北方向に平行して延びています。溝跡の規模は幅1.0～1.4m・深さは0.4～0.5mで、その間は約2.4m離れています。溝跡をはじめとして付近一帯からは多くの瓦が出土しましたが、あまり壊れていない完全な形に近いものもたくさんありました。これらの瓦は、溝跡から東側ではとてもたくさん出土したのに対し、西側ではほとんど出土していません。塔や金堂といった寺院建物の痕跡は確認できませんでしたが、こうした瓦の分布状況から、この見つかった2条の溝跡は、寺域の西辺を区画する築地塀に伴う溝などと考えられ、その東側に寺域が展開していたと考えられます。



蜂屋遺跡の位置



寺域西辺を区画する2条の溝跡



溝跡などから多くの瓦が出土しました



①忍冬文単弁蓮華文軒丸瓦(出土点数2点) にんどうもんたんべんれんげものきまらがわら

法隆寺若草伽藍に葺かれた瓦と同範(同じ木範で作った瓦)のもので、法隆寺と中宮寺以外では同範瓦は出土していませんでしたが、中房などにある範傷(=木範に生じた傷)が一致することから、同範と判明しました。まさしく法隆寺から伝来した瓦となります。詳しくは当協会ホームページの「調査員のオススメの逸品」第248回をご参照ください。法隆寺若草伽藍が焼失する670年以前のものであると考えられます。



②法隆寺式軒丸瓦(出土点数60点) ほうりゅうじしきのきまらがわら

法隆寺再建の際に主体的に用いられた軒丸瓦です。周縁の鋸歯文が線状に表現されており、平坦な中房が特徴です。蜂屋遺跡出土の軒丸瓦のうち、半数以上をこの軒丸瓦が占めています。滋賀県内で多数の法隆寺式軒瓦が出土した例はなく、県内でも特異な例です。また、③の軒丸瓦と同遺跡で出土する例もほとんどありません。



③法隆寺式軒丸瓦(出土点数38点) ほうりゅうじしきのきまらがわら

②の法隆寺式軒丸瓦と同時期のものですが、周縁の鋸歯文が互いに表現されており、突出する中房が特徴です。また、この文様の軒丸瓦は法隆寺からは出土しておらず、奈良県生駒郡三郷町の平隆寺で用いられたものです。こちらも蜂屋遺跡出土軒丸瓦の4割近くを占めます。軒丸瓦はこの瓦と②の瓦を主体的に葺いていたと考えられます。



④輻線文縁単弁蓮華文軒丸瓦(出土点数5点) ふくせんもんぶちたんべんれんげものきまらがわら

車輪のスポークのような周縁に有稜線花卉八弁の蓮華文が特徴です。輻線文縁の軒丸瓦は渡来系氏族の寺院に採用されたと考えられていますので、蜂屋遺跡の寺院建立に際しても、渡来系氏族の関わりが想定できます。同形式の瓦は栗東市の手原廃寺や大津市の穴太廃寺、南滋賀廃寺、崇福寺跡などでも出土がみられます。



⑤素弁蓮華文軒丸瓦(出土点数2点) そべんれんげものきまらがわら

飛驒にルーツがあり、同型は東近江市の瓦屋寺や近江八幡市の千僧供廃寺、京都府城陽市の平川廃寺の3例と類例が少ない軒丸瓦です。残存状態がよくないものの、花卉間に有稜線の間弁があります。また、わずかですが、周縁には忍冬文が配されています。特異な周縁であるため、瓦の創作には渡来系氏族が関わっているという説もあります。

⑥法隆寺式軒平瓦 ほうりゅうじしきのきまらがわら



この軒平瓦は②の法隆寺式軒丸瓦と同様に、法隆寺再建時に主体的に葺かれた瓦と同様のものです。三葉状の中心飾におおよそ3反転させた唐草文が左右に展開する形式をとります。中心飾の内郭が円形、内側のみハート形、完全なハート形の3種類が出土しています。県内外で出土が見られますが、軒丸瓦とセットで出土する例は少なく、大変珍しい例となります。

⑦⑧鴟尾 しび



鴟尾の起源は定説がないものの、中国の文献では海中にすみ雨を降らす魚とし、魔除け、防火を意味します。一般に大棟を飾ったことから、蜂屋遺跡近隣に大棟をもつ建築物があったと考えられます。

出土した鴟尾と考えられるものは2種類あり、文様が入る灰白色(⑦)のもの、文様のない褐色(⑧)のものがああります。⑦は円形のスタンプ、縦帯と線刻の鱗とみられ、棟に接する下部だと考えられます。⑧は部位については判然としないものの、成形された曲線部分があるため、内側で棟を覆っている部位と推測できます。

⑨丸瓦・平瓦 まるがわら・ひらがわら

蜂屋遺跡では完形品に近い丸瓦・平瓦も多数出土しました。これらは本瓦葺と言ひ、現在一般的な瓦葺とは異なります。丸瓦は行基瓦という上から見ると台形状の瓦を用いていました。平瓦も台形状になっていて、凸面には叩き締めた痕跡が、凹面には布目の痕跡が残っています。丸瓦1本で2kg、平瓦1枚で4kgほどありますので、建物1棟でかなりの重量になることがわかります。



蜂屋遺跡
現地説明会
資料

調査員のオススメの逸品 第248回
「栗東市蜂屋遺跡から出土した
忍冬文単弁蓮華文軒丸瓦」

